



No. 80

The University of Tokyo Forests News

科学の森ニュース

December 10, 2017

発行：東京大学大学院農学生命科学研究科附属演習林

国立台湾大学からサマースクールで来演

教育推進委員会

東京大学演習林と国立台湾大学では学生の相互交流を目的としたサマースクールを2016年から実施しています。今年度は台湾大から学生・院生10名が来日し、2017年9月2日(土)から6日(水)まで生態水文学研究所、富士癒しの森研究所、弥生キャンパスに滞在しました。生態水文学研究所では、国指定史跡「小長曾陶器窯跡」と赤津研究林を見学して、はげ山の再生過程を学んだほか、白坂量水堰堤において砂出し実習を行いました。富士癒しの森研究所では、木材の活用によって得られる癒しについて学んだほか、富士山の旧登山道を登って冷温帯から亜高山帯にかけての植生を観察しました。弥生キャンパスでの森林科学・生物材料科学専攻の研究室訪問では、とくに台湾と日本での教育システムの違いに関心が寄せられました。2018年は東大から台湾大に学生が派遣される予定です。



砂出し実習における流入土砂の測定（左上）、富士癒しの森研究所での薪割り体験（右上）、
森林科学専攻森林植物学研究室を訪問し福田教授と歓談（左下）、
生物材料科学専攻の信田教授より専攻の概要について説明を受ける（右下）

演習林の技術職員 3 名が 森林管理技術賞を受賞

2017年9月28日(木)新潟市で開催された全国大学演習林協議会秋季総会において加盟校の技術職員を対象とした平成29年度森林管理技術賞(3部門)の授賞式がありました。本学からは田無演習林の栗田直明さんが苗畑管理を通じた教育研究への永年の貢献により「特別功労賞」、樹芸研究所の村瀬一隆さんが「癒しの森プロジェクト」の確立に関する技術的貢献により「技術貢献賞」、北海道演習林の笠原久臣さんが長期生態系プロットと成長量試験地に関する調査研究とデータ整備による学術的貢献により「学術貢献賞」をそれぞれ受賞しました。

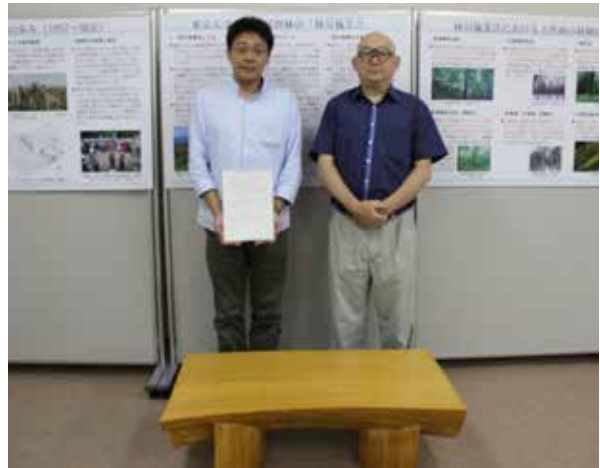


左から富樫演習林長、笠原さん、栗田さん、村瀬さん

センの座卓が北海道演習林に里帰り： 素材生産業者の家族から寄附

北海道演習林

富良野市西達布で50年にわたり素材生産業に関わってきた吉本隆雄氏(故人)の御子息で、農学部生物材料科学専修出身(H12年卒)の吉本昌朗氏(現 林野庁職員)より、北演産セン(ハリギリ)で作られた座卓の寄附をいただきました。吉本氏によると、伐倒時に幹が割れたため半割りテーブルを作成し、自宅で使用されていたとのこと。北演の売払簿を調べたところ、1990年度に99林班A小班で大口径立木販売の際に支障木として販売された胸高直径60cmのセンだったことが判明しました。座卓は、現在、森林資料館に展示されています。



座卓を手前に記念撮影(左から吉本昌朗氏、鎌田林長)

市民、東大農場、科学館とコラボ！ 子どもサマースクール

田無演習林

東京大学西東京キャンパスには農学生命科学研究科の附属施設である田無演習林と生態調和農学機構(農場)が隣接しており、農地・草地・林地が一体となったフィールドが広がっています。2017年8月1日(火)、このフィールドを使って、田無演習林・生態調和農学機構と地元市民団体・多摩六都科学館が4者協働で子どもサマースクールを行いました。市民の方々と協力しつつ、午前中は水田や草地で稲や昆虫の観察を、午後は演習林で森林土壌の透水性試験や土壌動物の調査を行いました。子ども達にとっては、自然と生活との結びつきを肌で感じる機会になりました。



簡易な透水性試験。水の浸み込みの速さに興味津々。

職場環境でのストレスが社会的に大きく関心を持たれるようになってきており、東京大学でもストレスチェックの義務化など対応する方向で動いております。そんな中、森の「癒し」に着目した研究教育活動を行っている富士癒しの森研究所では、2017年10月31日（火）～11月2日（木）の2泊3日で、教室系技術職員研修「労働ストレスの管理と回復のための活動および回復環境について学ぶ」を実施しました。ストレスに関する基礎的な知識、仕事のストレスと環境や心理の関係などについて学び、さらに身近な自然環境を活用したストレスからの回復について体験し、職場で役立てることができるヒントを得ることを目的とする研修です。

研修には全学より7名の受講者がありました。初日は医学の見地から健康についての基礎知識、心理学の見地から森林とストレスからの回復環境に関する講義の後、グループワークを行い、自身のストレス特性について理解を深めました。2日目にはプロの指導のもとでノルディックウォーキング*、薪割・焚火などの自発性のリフレッシュ活動体験を行いました。最終日には受講生が3班に分かれ、リフレッシュ及びリラクゼーション活動の考案を行い、研修で学んだ成果を発表しあいました。

「心の病気」は、弱い人だからなるのではなく、誰でもメンタル不調になる可能性があるとのこと。今回は技術職員研修としての実施になりましたが、すべての教職員、さらには現代社会全体にとって非常に重要な意味を持つ内容であったことと思います。

*ノルディックウォーキング：クロスカントリーの夏場のトレーニングとしてフィンランドで始まり、ポールを使用した歩行運動のこと。



紅葉の中でのノルディックウォーキング体験

演習林のイベント情報

詳細はホームページをご覧ください。各地方演習林にお問い合わせください。

【12月】

- 2日 東大教職員向け特別ガイド
「千葉演習林で楽しむ紅葉とランチ」◆（千葉）
- 2日 鴨川市・東京大学交流事業
「東京大学・小石川植物園見学ツアー」◆（千葉）
- 2-3日 全学体験ゼミナール「秋の奥秩父を巡る」☆（秩父）
- 3日 シデコブシの会「標石を探そうツアー」（生水研）
- 3日 休日公開（田無）
- 3日 東大教職員向け「リース作り体験会」◆（田無）
- 4日 内浦山県民の森「二日間川から養老川の源流をゆく」(千葉)
- 9-10日 全学体験ゼミナール「癒しの森と地域社会（冬）」☆（富士）
- 10日 第13回影森祭（秩父）
- 17日 房総横断・鋸山トレイル◆（千葉）
- 24日 体験活動プログラム「癒しの森の森林管理（冬）」☆（富士）

27-30日 全学体験ゼミナール

- 「森のエネルギーを使いこなす」☆（田無、富士）
- 27-31日 全学体験ゼミナール「伊豆に学ぶ1」☆（樹芸）
- 未定 千葉県勤労者山岳連盟「ロングハイク」◆（千葉）

【2月】

- 3日 森林博物資料館一般公開（千葉）
- 3日 東大教職員向け特別ガイド「冬の散歩みち」◆（富士）
- 上旬 全学体験ゼミナール「房総の森と生業（なりわい）を学ぶ」☆（千葉）
- 16-20日 全学体験ゼミナール「伊豆に学ぶ2」☆（樹芸）
- 21-23日 全学体験ゼミナール「雪の森林に学ぶ」☆（北海道）
- 未定 全学体験ゼミナール「ダムと土砂と海」☆（生水研）

凡例…無印：一般向け ☆：学生向け ◆：その他

【1月】

- 20日 公開講座「秩父演習林の哺乳類と冬の森」(秩父)

オオモクゲンジ
ムクロジ科モクゲンジ属
学名：*Koelreuteria bipinnata*

田無演習林



黄色の花（中央）とピンク色を帯びた袋状の実（左下）

オオモクゲンジは中国原産の落葉高木です。高さ 15～20m と日本に自生するモクゲンジよりも高木になり、二回羽状複葉の葉も長さ 50～60cm と大きくなります。9月に黄色の花に覆われ、雨が降るように花が落ちることから「golden-rain tree」の英語名を持ちます。花が散ってから1か月経たないうちに、5cm ほどのピンク色がかかった袋状の実を付けます。田無演習林に訪れた子どもたちは、実の独特な形と質感から「ポテトチップスみたい！」と大はしゃぎ。普段は目立たない存在ですが、開花期や結実期には人々を驚かせます。別名フクロミモクゲンジ。

名所名物案内

モノレール

秩父演習林

急峻な地形の多い我が国では、林道や作業道などの開設が進まず、伐採現場などへの徒歩での移動に伴う疲労が作業の効率や労働安全面の低下に繋がることが問題となっていました。モノレール（林業用モノレール）は、これらを解消する目的として開発されました。秩父演習林では、主に人工林の維持管理用として1999年に2路線（入山モノレール、中山沢モノレール）、亜高山帯地域における天然林の研究調査用として2001年に1路線（バケモノ沢モノレール）を設置しました。これまでの延長距離は入山モノレールが720m（標高差300m）、中山沢モノレールが520m（標高差250m）、バケモノ沢モノレールが1,545m（標高差500m）となっています。設置したモノレールのメーカーや機種はそれぞれ異なっていますが、基本的な構造に大きな違いはなく、1台の定員は5名（運転手含む）で傾斜約40度までの斜面を1分間に約30～45m昇降することができます。2016年には、バケモノ沢のモノレールに1台増設し、2台体制にするなど、秩父演習林において、モノレールは森林の維持管理、学生実習や各種の研究調査等の移動手段として、なくてはならないものとなっています。



人工林内に設置された中山沢モノレールの起点

科学の森ニュース (The University of Tokyo Forests News)

第80号 (No. 80)

発行日 平成29年12月10日

〒113-8657 東京都文京区弥生 1-1-1

発行人 富樫一巳

東京大学大学院農学生命科学研究科附属演習林広報情報委員会

編集人 後藤 晋

TEL 03-5841-5497 FAX 03-5841-5494

E-mail mori2017@uf.a.u-tokyo.ac.jp